

## 日本山岳会と私の登山③

# 日本山岳会におけるヒマラヤ

## 登山連鎖の軌跡(2)

重廣恒夫

70年代から80年代にかけて、日本山岳会は高い目標をかかげながら、ヒマラヤ登山を実践してきた。  
各登山隊のリーダーとして、若い隊員を育ててきた重廣恒夫氏の2回目は、ナムチャバルワ初登頂からマカルー東稜までを綴ってもらった。

### 海外登山基金

日本・中国・ネパール三国友好登山隊による世界で初めてのチョモランマ交差縦走は、予定通り5月5日に成功した。一次隊の成功に続いて、さらに複数の縦走隊を送り出す準備をしていたが、登山の成功と首尾の完遂を要求される

その後の山岳会の新たな活動資源を生み出した。

中国指揮部の強い要望により、以後の登山活動を断念した。予定通りの交差縦走の成果にはある程度の満足感はあったが、余力を残しての登山終了は、この機会にできるだけ多くの登頂者を出しておきたいという思惑を打ち砕いた。しかし、世にもまれな巨大登山隊は、

隊報告書「山岳」第九十四年、1999年に詳述された。

90年、92年、ナムチャバルワ

三国友好登山が成功裏に終わり、祝賀会がラサ、カトマンズ、北京、東京と順を追って行なわれた。ラサ空港を飛び立ったボーイング7

三國友好登山隊が日本山岳会にもたらした資源は、若い会員たちと剰余金である。交差縦走は誑売グループのバックアップのもとに行なわれた登山であったので費用の心配はなかったが、自前での募金の強化、国外費の為替差益、購入予定の登山装備のほとんどを寄贈によって賄うことができたことなどで、7000万円の剰余金を生み出した。それは今西壽雄総隊長、大塚博美副総隊長の配慮により、登山隊事務局、山岳会の財務担当との協議の結果、今後の海外登山の振興に有効活用するために、「海外登山基金」が、89年に創設(中国・日本・ネパール1988年チョモランマ/サガルマタ友好登山



1992年10月、未踏の最高峰ナムチャバルワに登頂

27は、チベットからネパールへ、ヒマラヤ山脈を眼下にしながらかトマンズへと向かった。峨々たる山並みを眺めながら、頭の中には次の目標が浮かびあがっていた。

80年、87年、そして88年と成都からラサを往復するたびに額をこすりつけて眺めた世界最高の未踏峰を登りたいという夢である。80年のチョモランマ登山が成功した

帰路、宮下秀樹副隊長はその「夢の山」への登山許可申請を北京で行なったが、いろいろい返事はなかった。しかし東京での交差縦走の祝賀会に来日した中国登山協会の幹部の感触を確かめ、再び登山許可申請を提出した。そして90年8月、中華人民共和国国家体育運動委員会から、ナムチャバルワの特別登山許可を受け取った。

91年に登山を実施するためには、秋の偵察登山を行なう必要があった。神秘の山として守られてきた孤峰には、登頂を確実にするため情報に余りにも少なかったからである。偵察の同行は、当時若手の信望を集めていた早坂敬二郎氏と大西宏・佐藤正倫とした。84年のカンチェンジュンガ以降、山岳会の今後のヒマラヤ登山は山岳部

出身者が中心になると感じていたからである。91年の登山隊では高見和成氏に登攀隊長をお願いし、木本哲にも加わってもらった。ナムチャバルワ北西壁の岩壁帯は登攀のプロフェッショナルでないとは通過できないのと、若い人達に登攀技術の伝承をしたいとの思いがあつたからである。

しかし、10月16日、並外れた体力でルート開拓の牽引役となつていた大西隊員を雪崩で失った。降雪直後の行動が事故の要因であつたが、悔やんでも悔やみきれない事故であつた。日本からご遺族にも参加してもらい葬儀・茶毘が現地で行なわれた。その後登山を再開したが、11月30日、すでに冬の様相を呈するナムチャバルワから撤退した。

12月7日、他の隊員よりひと足先に帰国した私は晩餐会場で登山の報告をし、ナムチャバルワ峰の再挑戦を訴えた。山岳会内においても再度の登山隊の派遣と私の登山隊長続行についての是非を巡っては多くの議論がなされたが、今回かぎりの許可を無駄にしないためにも次年度の登山隊には登山の絶対の成功と安全の確保という二

重の足枷で挑むことになった。

92年の日本側メンバーは、88年の友好登山隊のメンバーであった山本一夫氏に登攀隊長に、三谷統一郎、山本篤、佐藤正倫、青田浩が隊員となり、チベット側隊員と共に全員登頂をめざした。前年の失敗の要因に、激しく変化するナムチャバルワの天候予測が十分でなかつたという反省があつたので、カンチェンジュンガ登山隊で気象を担当した飯田肇の参加要請と気象ロボット、気象衛星の受像などの導入を行なった。しかし、正確な気象予測はできても荒れ狂う悪天を制御できない現実と闘いながら、10月30日には一次隊6人が未踏の頂に立ち、翌日、二次隊の5人も登頂した。

1940年、「ヒマラヤンジャーナル」12巻の巻頭を飾った一枚の写真に、世界の登山家はその登頂を渴望し、山岳会が10年以上も抱き続けた夢の実現と同時に、日中国交正常化20周年の記念に華を添えたのであつた。

#### 95年マカルー

80年5月10日、北京時間の午後9時、尾崎隆隊員と共に北壁から



上空から望むマカルー。頂上から右手の稜線が東稜

チョモランマの頂上に到達した時、夕日が西方の遙か彼方に沈む一瞬、巨大な塊となつて横たわつていた眼前のマカルーが朱に染まつた。その強烈な輝きは、帰路8600mでピバークし、朦朧とした意識のなかでも鮮烈な印象として残つた。

87年12月末、翌年に実施する交差縦走の偵察のためマカルー上空を飛んだ。広大なマカルー山塊にあつて、カンシュン川から一気に頂上に延びる荒々しい東稜に目を



1995年5月、長大な東稜からマカルー登頂に成功

奪われた。そして92年、ナムチャバルワの日中合同登山隊が成功したタイミングを見計らって、マカルー東稜の登山許可申請を行なった。93年10月、中国登山協会から登山許可を受け取り、山岳会創立90周年の記念事業として実行に移されることになった。

この登山隊では世代交代を意識した。なぜならどんなに優れた組織でも同じメンバーでの運営が長く続くと、その全体能力は先細りして組織の疲弊に気がつかないことが多い。組織には常に新しい血を注いで新陳代謝をはからなければならぬのは常識であり、山岳会や登山隊も同様である。そのた

めには継続的に登山隊を組織する必要があり、組織運営を次代の会員に委ねることを考えて、登攀隊長は山本宗彦とした。「登頂」「成功」という二文字を獲得するためには、そのための隊員選考が必要であるが、山岳会の記念事業でもあったので会報を通じた公募と、各支部に会員派遣の要請を行なった。88年の交差縦走隊メンバー5名に、新たに山岳会に入会した田辺治は母校信州大学や日本ヒマラヤ協会、群馬岳連など多岐にわたったヒマラヤ登山隊に参加した歴戦の雄であり、松原尚之、谷川太郎らの若手に加え、当時まだ学生であった竹内洋岳、荒井俊彦など次代を担う構成で今回も全員登頂をめざした。

95年2月中旬、先発隊がネパールに入ったが、当地は未曾有の大雪で十分な偵察もできないまま本隊を迎えての登山活動となった。予想外の難路と悪天候のために苦闘の毎日であったが、モンsoonの到来を迎えたこと、隊員の疲弊も激しくなったので、5月18日にジャンクションピークに到達したのを機に頂上に到るルートを変更した。8月21日、田辺・山本篤・

松原・荒井の4名が、翌22日、山本宗彦登攀隊長・小野岳・谷川・竹内の4名がプラトールより登頂し、25日に全員無事にベースキャンプに帰着して登山は終わった。ベースキャンプを去る前夜、「マカルー登頂は大きな感動であっても、ほんのわずかな体験でしかないことを自覚し、更なる研鑽をして、新たな目標に向かって前進してほしい」と結んだ。

### これからのヒマラヤ登山

日本山岳会は1976年から1995年までの20年間で、22隊の登山隊・偵察隊に205人の会員、30人の学生部隊員、20人の非会員を派遣している。その後、山岳会での経験を経糧として、多くのヒマラヤ登山に邁進して大きな成果をあげたことは、青年部による96年のK2南南東リブからの大量登頂、97年のダウラギリI峰、98年のカレンチェンジユンガ北面からの登頂などで明らかである。それは、ヒマラヤ登山の回数を重ねた隊員(2回以上の参加は43名)たちが、その後母校の目標達成の原動力となったことで物語っているし、マカルー東稜が初めてのヒマラヤ登

山であった竹内洋岳の、その後の活躍をみても明らかである。これは50年前のマナスル登頂を嚆矢とする山岳会におけるヒマラヤ登山の連鎖の成果であったと信じて疑わない。

しかしその後、組織の継続を念頭においた事業は減少し、ヒマラヤ登山の連鎖も途切れてしまった。少子高齢化による若年者の減少だけではなく、体育系のクラブ自体が衰退している社会現象下ではない方ないことも知れないが、山岳会においては高所登山研究委員会がなくなったことも途絶の大きな要因ではないだろうか。未知未踏、バリエーションという言葉が死語になりつつある現在ではあるが、山岳会という組織の存続を考えた時、山岳会の目指すべき理想を再確認し、それを実現するための概念を構築し、具現化する筋道を描くことが必要であり、そのため再びヒマラヤ登山の第一歩を踏み出す時期にきているのではないだろうか。一枚の地図から始まるヒマラヤ登山、100年を過ぎた日本山岳会に求められているのは、ゆるぎなき情熱と温故知新からの一歩前進である。